

延慶本平家物語における編集の方法

— 縁起文引用をめぐって —

現存する『平家物語』の多数の諸異本、それらの解明が研究史上、重要な位置を占めてきたことは周知の事実である。特に近年は、諸異本の系統論や原態論、古態論に向かうよりも、まず一異本自体の有する世界を明確に把握しようとする傾向が強まってきたように思われる。^①それと同時に、一異本のあり方自体も多様な角度から捉えられるようになってきており、『平家物語』研究史はそのような意味で細分化され、また深められていくといえるであろう。

このような研究史の現状は、いうまでもなく『平家物語』諸異本の有する複雑な形成の過程や編集の過程など、本文自体の抱える多様性と密接に関係している。むしろ、異本自体の多様性が、方法論自体を多様化させているといったほうが適切かもしれない。

このような立場から一異本を論じるには、当然のことながら個々の異本の独自性や、それと大きく重なるところの諸異本間の差異性

が問われねばなるまい。諸異本の総体である『平家物語』において、一つの異本の位相は絶対的なものではなく、きわめて相対的なものである。それゆえ、まず、諸異本を並列化して対置させてみることから始めなければならない。諸異本間の差異性は、そのように対置された一異本を論ずることにより、おのずから出現するであろうし、先後関係なども同時に明らかとなるに相違ない。

小稿では、このような認識に基づいて、編集という視座から一異本論を展開するために、『平家物語』諸異本中、最も興味深い編集の在り様を示すと思われる延慶本を対象に据えて論じていくこととする。

(一)

一異本の独自性を編集という面から捉える際に、編集方法につい

て検討することは重要であろう。それは、編集作業がある一貫した方法で行われるということを前提とし、編集における内容・表現等の統一性にかかわっている。一異本に特徴的な傾向性がそこに見出せれば、その異本の編集されていく過程も明らかになるであろう。

では、どのような記事に対峙したとき、異本の特徴的な編集の様相は姿を見せるのであろうか。そのことについて武久堅氏は『平家物語』を「伝承部」と「著述部」の「編成態」とされ、「日記・史書・縁起・説話集等を資料として新たに執筆された著述部」が、「記事の選択も含めて当然、編集者の思想や編入動機が影を落とす」ものであると述べられている^②。氏のいわれるところの「著述部」に相当する部分は、当然のことながら『平家物語』とは全く無関係に作成されていたものである以上、それらが編集されてくる際に、編集上の何らかの特徴が現れてくることは想像に難くない。このことは、麻原美子氏がかつて阪口玄章氏が『平家物語』の形成に「従属説話」と「主要説話」の二種がかかわったとされたこと^③に基づいて、軍記物語全般に着目し、

従属説話の方はむしろ連続した話談を分断し（中略）今日の我々の目からは何らその存在の必要性が認められないのであるが、その種類と位相ははからずもその作品の、或いはその諸本の特質を見事に物語る結果となつて、諸異本を含めての作品成立過程の一端をのぞかせることになり、研究対象としてははるかに重要な位置にあるのである。

延慶本平家物語における編集の方法

という見解を提示し、それらを「挿入説話」と呼んで考察されたこと^④とも関係が深い。「挿入」という話にどのような意味をもたせておられるかは判然としないが、麻原氏の対象とされた記事から考えれば、故事や寺社の縁起文などであるから、武久氏がいわれたところの「著述部」に含まれるものである。それらが「その作品の、或いはその諸本の特質を見事に物語る」ということは、必ずしも編集上の問題に限ったことではないかもしれないが、編集方法を探るうえでそれらの記事が重要であることは疑いえない。治承・寿永の内乱を基本的には編年体的に叙述する『平家物語』にあつて、元來それとは全く無関係に存在した記事が、作品のどのような位置にどのような意図で配されるかは、編集方法を考えるうえで興味深い問題である。

このような観点から、ここでは延慶本が特異な編集の方法を示す寺社の縁起文に対象を絞って考察していきたい。そのことを論じるにあたっては、まず『平家物語』全体における縁起文の編集が、どのようになされているかについて論じる必要があるだろう。内容的な面からいえば、縁起文はこの寺社のものであれ、また草創縁起、靈験縁起のいずれであれ、その寺社の貴性をいう点では一致している。延慶本が引用する際にも、そうした内容を含みつつ、寺社の名称を明らかにしているので、その点に関していえば、編集において

諸異本に差異はあらわれない。

ここで問題としたのは、形態的な面である。縁起文引用において『平家物語』諸異本は同一の形態をとっている。そのことを、諸異本にはほぼ共通して記載される善光寺の縁起に例をとって考えてみたい。

諸異本を通じて善光寺の縁起は、善光寺の炎上記事の後に続いて記され、覚一本では巻二後半の山門滅亡記事の後、延慶本では第二本の前半で同じく山門滅亡記事の後、源平盛衰記や長門本、その他善光寺炎上の記事をもつ諸異本いずれも山門滅亡の記事の後に位置させている。なお、屋代本・百二十句本等には善光寺炎上の記事はなく、したがってそれらには善光寺の縁起も含まれていない。

善光寺の炎上の記事に続いて縁起が記されてくる理由は、諸異本共通して章段末尾にある善光寺の縁起引用の後の結文が明らかにしている。延慶本で示すと

王法傾ムトキハ仏法先滅ト云ヘリ、サレハニヤカヤウニサシモ止事ナキ
靈寺靈山ノ多ク滅ヒヌルハ王法ノ末ニ臨メル瑞相ニヤトソ歎アヘル^⑥

となっている。長門本や源平盛衰記においてもこの結文の内容はほぼ等しく、覚一本では「王法ノ末ニ臨メル瑞相」が「平家の末になりぬる先表」^⑥となっていて相違するが、善光寺の縁起を引用する意図に違いはない。それは結文から明らかかなように、善光寺炎上によ

って仏法の滅びをいい、「サシモ止事ナキ靈寺靈山」の例として善光寺を位置づけるために、縁起を引用するという意図である。つまり、ここでは善光寺の貴性を縁起で示すことによって、その「止事ナキ」寺院の炎上が、前段の山門滅亡とともに、仏法の滅びの強調となるのである。

そのことをふまえたうえで、編集方法としての引用の形態に視点を移してみよう。『善光寺縁起』は、早く『扶桑略記』等に一部引用の形態で記載されている。『扶桑略記』には、冒頭に「善光寺縁起云」、末尾に割注の形で「已上出彼寺本縁起之文」とあって、その存在が知れる。ただし、現存の『善光寺縁起』の完本は『続群書類従』所収の四卷本（以下、類従本と呼ぶ）が最も古いものと思われ、米山一政氏に拠れば、類従本は「応安三年以後応永三十四年までの間になったもの」と推定されるので、おそらく『平家物語』が依拠した『善光寺縁起』は、『扶桑略記』の引用した縁起から類従本に至るまでのものであったのだらう。しかし、その二つに比べてみて、『平家物語』諸異本中の記事はいずれも簡略化されており、諸異本中最も記事の長い源平盛衰記にしても、月蓋長者の娘が五種の悪病を患い、その救いを長者が仏に求めたというもので、その部分のみが他諸異本より長いだけで、それも類従本に見られる語を大幅に簡略化しているに過ぎず、章段内の他の部分の記事と同様

である。

以上のことから、『平家物語』諸異本における『善光寺縁起』引用の形態は、縁起を要約したものであるということができよう。では、なぜ要約という形態で引用されてくるのであろうか。それは、寺社の貴性を主張することを作成の目的とした縁起文と、先に明らかにしたように「止事ナキ靈寺」として善光寺を位置づけようとする『平家物語』諸異本の引用の意図とが合致したためであろうと推測される。もともと、縁起文の全容を引用すれば諸異本の引用の意図は不足なく充たされるのであろうが、例えば類従本のような長大な縁起を全文引用することは実質的に不可能なので、引用の意図を果たすために、縁起のもつ世界を崩さず要約という形態で記してくるのであろう。

こうした寺社の貴性をいう縁起文の作成の目的が、『平家物語』の引用の意図と一致することは、この善光寺の場合に限らず『平家物語』の縁起文引用において一般に見出せる傾向である。たとえば、三井寺の縁起は善光寺の場合と同様、炎上の記事の直後に位置している。この三井寺の炎上記事に関しては、諸異本、位置的に異同があり、覚一本、源平盛衰記は高倉宮・頼政事件の直後、延慶本は南都炎上の前に各々存在する。しかし、炎上記事の後に三井寺の縁起を置くという構成は同じであり、内容にも大きな相違はない。また、

延慶本平家物語における編集の方法

そこで引用される三井寺の縁起は、『扶桑略記』『今昔物語集』『伊呂波字類抄』『古今著聞集』等、多くの文献に見出されるものもの要約となっている。

この三井寺の縁起引用の意図に関しても、善光寺の場合と同様、結文において明らかにされる。ただし、先にも触れたように諸異本によって位置が異なるので、結文も相違している。覚一本では、

かゝる天下のみだれ、國土のさはぎ、たゞ事ともおぼえず。平家の世の末になりぬる先表やらんとぞ、人申ける。

となっていて、高倉宮・頼政事件も含めて「かゝる天下のみだれ、國土のさはぎ」と捉えており、それを平氏滅亡の前兆とする。延慶本では、

カク止事ナキ聖跡ナレトモ事トモ云ワス弓箭ヲ入ヌルコソ悲ケレ

であって、三井寺の滅びを嘆く詞章となっている。源平盛衰記も結文はこれと同様である。

このように、結文の内容は相違するものの、三井寺の縁起を引用する意図は、やはり三井寺の貴性をいうことである。覚一本は、そうした寺院が滅ぶことを「天下のみだれ、國土のさはぎ」とし、延慶本や源平盛衰記では「カク止事ナキ聖跡」であることをいうために縁起文が引用されてくるのである。そしてそれは、縁起文作成の目的と合致するがゆえに、要約という形態で引用されてくるのであ

る。

以上みてきたように、『平家物語』諸異本の縁起文引用は、寺社の縁起文作成の目的と引用の意図とが重なることよって、要約という形態をとることが明らかとなった。このような編集方法は、延慶本にもみられたわけであるが、次に延慶本が他諸異本にない独自の編集の方法をとることを、引用の形態面から明らかにしてみたい。

(一)

延慶本第五末―十五「惟盛粉河へ詣給事」の章段を、『粉河寺縁起』の引用から検討してみる。

この章段と『粉河寺縁起』の依拠関係については、武久堅氏が詳細に検討されていて、その点については異論をはさむ余地はない。ただ、小稿の目的は延慶本の縁起文引用の方法をみることにあるので、その観点から論述していきたい。

『粉河寺縁起』は、漢文縁起と和文縁起三十三話から成る。成立は「第二十二段に見える天福二年（一二三四）の年号が最も新しいところから、それよりさほど隔たらない時期」と考えられるが、漢文縁起については一〇五四年成立の醍醐寺本『諸寺縁起集』の中の『粉河寺大率都婆建立縁起』に近く、和文縁起とは別個に成立したらしい。『統群書類従』は両者を分けて記載するが、日本思想大系

20『寺社縁起』所収の伏見宮家旧蔵本では漢文縁起と和文縁起を併せて一本とする。漢文縁起は主として寺院草創を記し、和文縁起は粉河寺に関する靈驗等を記すというように、内容的には分けて考えることができる。

延慶本はこの漢文縁起と和文縁起、それに武久氏の指摘にもあるように『粉河寺大率都婆建立縁起』から抄出して引用しながら本文を構成する。まず、瀧口入道と惟盛一行が粉河寺へ詣でた際に、瀧口の言葉の中に縁起が引用されている。それは和文縁起の「法懷聖人依弘法大師靈告山住當寺遂往生第廿八」「石崇聖人奉山王十禪師勅參當寺遂往生第廿五」「公舜法印依熊野權現御誠祈申往生第卅一」の三話で、各々から抄出している。そして「来世ノ引接ヲ祈御坐ムニ不可有疑」という瀧口の言葉で締めくくっている。「来世ノ引接ヲ祈」る出家後の惟盛に対して、『粉河寺縁起』から往生話を三話引用してくる延慶本の意図は明白であろう。和文縁起三十三話中、第廿三から第卅三の十一話はいずれも往生話で、他二十二話は粉河寺の貴性を様々な面から述べている。このような形である和文縁起から、往生話を三話とりだし、その各々から抄出する延慶本には、単に抽象的に寺社の貴性をいうこととは違い、往生をはっきりと意識して引用する姿勢がうかがえる。しかも、その三話が互いに往生話であるというだけでなく、これから惟盛が詣でようとする熊野権

現が公舜法印に「来迎引接ハ本地ノ称也、粉河ノ生身ノ観音ニ祈申セ」と夢告したことを縁起第卅一話から同文で抄出したたり、「吾朝ノ往^補陀落山ニ可^レ期^レ仏国之不^レ退^レ転地^ニ」という部分で粉河寺を補陀落山とする縁起第廿五話から抄出するのである。特に後者の引用は、往生地としてふさわしい粉河寺をいうことと同時に、維盛の入水を予想させているともいえる。『粉河寺縁起』の中で、「補陀落」の語が見えるのは、この第廿五話と、第九話、第十四話のみで、第九話は漢詩の中に、第十四話は和歌の中に各々見出され、直接的に往生とは関係していない。補陀落山と粉河寺を重ねあわせ、往生をいう第廿五話から抄出して引用する延慶本は、おそらく維盛の補陀落渡海を擬した入水も暗示させていると考えられるのである。

この瀧口の言葉として、『粉河寺縁起』から抄出して本文を構成する延慶本は、熊野権現の託宣、補陀落往生という二点を中心に、三つの往生話から抄出して引用するという編集方法をとることがわかった。これは他諸異本にはみられない縁起文の編集方法であるといえる。以下、その抄出という点を中心にみていくこととする。

次は維盛らが粉河寺の内部へ入った時に見た池の説明で、武久氏も「最初出現の御池は、縁起第五と十一の巧みな合成である。」と指摘されているように、抄出して本文を構成するという延慶本の特徴をよく示している。

延慶本平家物語における編集の方法

その後、維盛らが境内をめぐるっている時に桜の木があり、そこで「藤原宗永移栽花木子孫繁昌第十三」が要約して引用される。特にここで注目したいのは、藤原宗永が「武勇の家に生ず。狩獵を事とす。」と縁起に記されている点である。維盛は往生を願って粉河寺に参詣するのだが、平氏の嫡流小松家に生まれ、度々の合戦にも大將軍として出陣した武將にとって、殺生という罪障が当然往生の妨げとなる。ここで「武勇の家」に生まれ「狩獵を事」としていた宗永が、仏道に帰依して往生を遂げたという話を引用してくるということは、維盛の罪障も滅し、往生を遂げることを予測させているのである。

次に「抑当寺者光仁天皇」で始められる漢文体の引用がある。これは、漢文縁起や『粉河寺大率都婆建立縁起』にみられる、大伴孔子古の建立由来と河内の佐大夫の子供の病気が平癒した話で、武久氏も指摘されているように、漢文縁起よりも『粉河寺大率都婆建立縁起』に近く、部分的に和文縁起「後白河法皇御願千手堂中尊因縁第廿一」に拠っている。大伴孔子古の話は、草創縁起で粉河生身観音の由来を記している。これも先ほどの宗永と同様「麋鹿ヲ逐ヲ以テ業トシ」ていた人間であり、維盛との重なりが指摘できる。河内佐大夫の話は、観音の功德をいうものであり、愛子の病の平癒をいうところに、都に残してきた子息六代らの安否を気づかい、それが

理由となつて屋島の陣を脱け出した維盛の心情との接点が見出せる。続く花山法皇の御幸は和文縁起の「花山法皇第六」からの抄出で、「常燈ヲ拜給ニモ無始ノ罪障モ消ヌラン」「六根罪障過現所犯一時消滅トソ聞ヘシ」というような部分からも明らかなように、罪障を滅して往生を遂げようとする維盛の意識と重ねあわせることを意図して引用されているといえよう。

以上みてきたように、延慶本における『粉河寺縁起』からの引用は、抄出という形態でなされ、各々が維盛自身の境遇や心境と重ねあわされているということが判明した。そして、そのことは

是以七千夜叉之鎮護ニハ妻子安穩ノ憑ヲ繋ケ、十二大願ノ真僞ニハ惟盛菩提ノ台ヲ折ルト伏拜テ泣々下向シ給ケリ

という章段の結文でいっそう明白となるであろう。すなわち、延慶本は維盛の「妻子安穩」と自身の往生を願う姿を、『粉河寺縁起』から病の平癒をいう話と、往生話、それも多く罪障を滅して往生した話を抄出して、この章段を構成してくるのである。

(一)でも触れたように、延慶本の縁起文引用において、基本的には他諸異本と同様、要約の形態がとられるわけだが、この『粉河寺縁起』からの引用にみられたように、抄出の引用と呼ぶような形態をとる場合がある。これは、先行する縁起文から延慶本に必要な部分のみを合成して編集する方法であり、要約して編集する場合とは明

らかな差異がある。その差異は、引用の意図の相違からうまれるものであり、この章段において延慶本が抽象的に粉河寺の貴性をいう必要はなく、維盛の心情との対応部分だけをとりこめばよいのである。

縁起文の引用において、『平家物語』に一般にみられる要約の形態では、縁起文の内容自体が問われることはない。縁起文は元來、寺社の貴性をいうのであるから、同じことを引用の意図とする場合は、縁起文がどのような内容を有するか、ということは問題ではないのである。極端にいうならば、善光寺の縁起文が「止事ナキ靈寺」をいうために引用されているとしたり、善光寺が炎上した頃、炎上したり滅びたりした他の名刹があれば、その寺院の縁起文が引用の対象になったかもしれない、そこで引用されるのが善光寺の縁起でなければならぬ必然性は無い。

逆に、抄出する場合はここでみてきたように、粉河寺なら粉河寺の縁起文でなければならぬ。このような編集方法は、『平家物語』諸異本中、延慶本にのみみられるものであって、編集の一特徴であるといえるであろう。

(二)

次に、第四一六「安樂寺由来事付靈驗無双事」の章段における

『北野天神縁起』等からの引用について考察する。この章段については、横井孝氏が『北野天神縁起』『大鏡』『天満宮託宣記』からの引用を指摘され、「延慶本、『縁起』類は『大鏡』そのものよりも、『大鏡』の拠った説話(乃至資料)自体に依拠した、といった方が真に近かろうか」と推察されているが、最近、武久堅氏は「『大鏡』以後に成長発展した天神説話、縁起、託宣類の書承資料に依拠することによって、充実した安楽寺由来、靈驗無双譚の編集を見ることに至った」とされ、本文を九つの部分に分け、それぞれの依拠を綿密に分析され、横井氏とは別の見解を明らかにされた。

この武久氏の依拠関係についての論考には異議をささむべきところはない。ただ『北野天神縁起』からの引用は、梅津次郎氏が冒頭部の相違から縁起を甲・乙・丙の三つに分類されたのに加えて、村上學氏が丁類とされた『神道集』巻九「北野天神の事」や「洛陽北野天神縁起」などと飛梅の話や託宣中の漢詩の配置などの部分で、他三類に比して近接性を示すことを述べておきたい。

さて、この章段においても粉河寺の場合と同様、抄出という形態で引用がなされている。問題は、縁起のどのような部分が抄出されて本文を構成しているのか、という点である。そのことを考えるにあたっては、やはり結文の表現に注目するべきであろう。この章段では、他の章段とは違い、結文とみられる部分が末尾ではなく、章

段の中途に入っている。

サレハ経盛昔ノ御事ヲ思出シ奉テ、フルキ都ノ恋サハト詠メ給ケルナル
ヘシ、昔ハ沈^ニ無実之恨^ニ天下^ヲ為^シ靈魂^ニ今^ハ都部之祟^ヲ救^ヒ護^リ國家^ヲ成^シ神
明^ヲ給^ヘリ、十善帝王三種ノ神祇ヲ帶シテ御ス、争カ還幸ノ御納受モナ
カルヘキト各心強クソ被^レ祈ケル

これは明らかに、この章段がどのような意図で構成されているかを示すものであり、末尾にはないが結文とみなしてよいであろう。この文を境に、この章段は道真の死と死後の奇瑞や託宣の詩をいう前半と、北野社の靈驗、及び託宣で構成される後半とに分けられる。

「サレハ経盛」以下の部分は、前の章段「平家人々詣安楽寺給事」で

旧都ヲ思出テ修理大夫経盛カクソ詠給ケル

スミナレン古キ都ノ恋シサハ

神モ昔ヲワスレ給ワシ

とあることに対応し、「サレハ」は章段の前半部、特に道真が太宰府に流され、そこで『大鏡』や縁起から一様に無実を訴える和歌を中心に抄出して無実を強調し、悲嘆の中で死んでいったことを受けている。

この結文の内容を検討してみると「昔ハ」で始まる部分は、道真の流罪について触れるのであるから章段の前半部に対応し、「今」で始まる部分は、神となって靈驗をほどこすことであるから章段の後半部に対応することがわかる。この後半部で示される靈驗は、待

賢門院の女房が和歌によって無実を晴らされた話と、大納言禪師が継母に無実の罪を着せられたが、これも和歌によって無実が晴らされたという話で示される。後者は、武久氏がいわれるように縁起に類話はあるが、諸説話集等にみられないものである。ただ、ここに記載される和歌は、『統詞花和歌集』に「ただすのやしろのはしらに女のでにてかきつけたりける歌」という詞書で記載されている。⑩
北野社でのこととする延慶本と詠歌状況が相違するので依拠関係は判断しかねるが、いずれにせよこの二話は同内容の記事で天神の靈験をいうのである。

ここで注目したいのは、縁起諸本がいずれも天神による靈験を記すが、その内容は無実が晴れたというものばかりではないということである。例えば、建久本では仁和寺の阿闍梨の乗る牛車の牛が死んだ話があり、建保本では仁和寺の西念の往生活なども含まれている。このことから、延慶本には天神の靈験を、無実を晴らすという点から構成しようとする意識があつて、このような抄出の引用の形態をとつたと解される。

同様のことが、章段末尾の託宣の引用についてもうかがわれる。これは、天曆九年の比良宮での託宣であるが、『天満宮託宣記』には他の託宣も当然含まれており、特に北野社草創にかかわる天慶五年の多治比の女あや子への託宣は、道真を天神として祀る契機とな

つたもので、縁起にも天曆九年の託宣とともに記されており、少くとも編集者の視界には入っていたと思われる。この比良宮での託宣の方を延慶本が記す理由は、この章段の構成の意図から考えて、託宣中の

若命終當生如我慮外乃灾遇年人惣天怙悲年者助
救比人沈損者糺身成願天

の部分にひかれたからだと思われる。

延慶本の『天満宮託宣記』からの引用は、武久氏も指摘されているように「積極的な加筆は行われてい」ず、ほとんど同文で引用している。ただ、この部分のみ

我命終之後如我遇無実之難又惣怙悲者救ケ、又無実ニ沈ミ損セシ者
ヲ糺明スル身ト成ント願セリ

となつていて「慮外乃灾」が「無実之難」に、「人沈損者」が「無実ニ沈ミ損セシ者」になつている。文意はさして変わるわけではないが、延慶本と託宣記との相違の部分に「無実」という語が見えるのは興味深い。

このように章段の後半部では、一貫して天神が無実の人間を救うという靈威をほどこすことが主張されている。このことを、先に示した結文との対応関係で捉えてみると、還幸を願う一門は、いわば無実の罪によって西国を流浪していると解釈される。結文中の「十

善帝王三種ノ神祇ヲ帶シテ御ス」という部分は、安德帝を奉ずる一門の正統性の主張である。延慶本は、無実讒奏による道真の流罪と、安德帝を奉ずる平氏一門の流浪を重ねあわせ、二つながら非合理的なものとして、この章段を構成する。そして、そのことは、延慶本が前半部では道真の無実の主張を、後半部では天神が無実の人間を救うということ章段構成の意図として、抄出の引用という形態で編集することを示しているのである。

ただ、ここでの一門の還幸の祈りは成就しなかったわけであり、この章段を配する延慶本の意図は、積極的に作品の構想と結びついてはいない。延慶本の記載どおりならば天神の加護を得て、一門は都に戻るはずなのである。これを、構想という視点から捉えるならば、佐伯真一氏が主張された「部分構想」^④と呼べるものであろうが、延慶本には都を離れても三種の神器をもつ安德帝を正統とするような記述が散在し、この章段もそうした意識のもとで構成された可能性があることを指摘しておきたい。

延慶本の編集が決して一回きりの所作ではなく、幾度かにわたったであろうことは、武久氏が一貫して主張しておられるとおり^⑤、もはや疑いえないことであろう。そうした編集のなされた形跡は延慶本の本文の随所にあられ、あるいは長門本や源平盛衰記との比較

によってうかがい知ることができる。ここで扱った特徴的な編集方法によって構成された二章段は、どちらも延慶本にしか存在せず、それゆえ後次的、あるいは増補的という捉え方をされてきた。そのような考え方は決して誤りではないが、諸異本に共通する記事は早くに編集されたと考えていることには、疑問を抱かずにはおれない。比較的早くから作品内に存在した記事でも、何度かの編集作業の中で新たに編み直されたかもしれないからである。では、現存の延慶本からそうした編集作業をどのように説明していくのか。小稿の出発点はそこにあり、同一の編集方法、それもきわめて独自の編集方法によって構成される章段は、同一の編集作業を受けているという認識を前提として、延慶本にみられる抄出の引用という形態を考察したのである。このことから少なくとも、(一)・(三)で扱った二章段は同時期の編集作業を受けていることが明確となったと思われる。

延慶本の特徴的な編集方法である、この抄出の引用は、対象とした二章段のみならず、比較的出典の明確な記事では検証可能である。特に延慶本内の故事については、原拠からの抄出性が論じられたものもあり、編集方法としての抄出の引用が、延慶本の特徴として見定められそうである。

ここで、そのような編集を可能とした編集者の資質なり、職能なりを論じるつもりはない。問題は、延慶本がいかに編集されている

かであつて、編集者の位相を確定することは本稿の主旨ではない。それよりも、もつと編集自体に眼を向けたのである。諸異本に共通する記事で、延慶本のみが内容を異にするとき、このような編集方法の視点からの解釈も必要となるであろう。内容の差異が編集方法の差異であることは充分に考えられようが、このことについての詳しい論究は、いずれ稿を改めて検討してみたい。

注

- ① たとえば、佐伯真一氏「平家物語本文における継承と創造の問題」〔伝承文学研究〕28号、昭58・1。松尾章江氏「源平盛衰記の饒舌」〔平家物語論究〕所収で主張されている。
- ② 『平家物語成立過程考』(一三頁)。
- ③ 『平家物語の説話的考察』(七三頁)。
- ④ 「軍記物語挿入説話の位相」(馬淵和夫博士退官記念説話文学論集)所収。
- ⑤ 延慶本の引用はすべて大東急記念文庫蔵、心水書写『延慶本平家物語』全6巻(汲古書院)による。なお影印本のため、漢字表記は現行のものを用い、読点は私に施した。また、漢文体の部分の訓点は、明らかなものについては私に補った。
- ⑥ 覚本の引用は、日本古典文学大系本(岩波書店)をすべて用いた。
- ⑦ 『扶桑略記』第三、欽明天皇二十三年十月三日条。引用は、すべて新訂増補『国史大系』第一二巻による。
- ⑧ 『群書解題』第一八上(五〇)〜五一頁。
- ⑨ 「維盛粉河詣の成立―延慶本『平家物語』第三次加筆の徴証―」〔日本文藝研究〕28巻1号、昭51・3。
- ⑩ 桜井徳太郎氏「日本思想大系20『寺社縁起』(岩波書店)所収の『粉河寺縁起』の解説。
- ⑪ 前掲⑨と同じ。
- ⑫ 『粉河寺縁起』の引用は、すべて『続群書類従』(二十八巻上)本による。
- ⑬ 前掲⑨と同じ。
- ⑭ 前掲⑨と同じ。
- ⑮ 「延慶本平家物語と天神縁起説話―付、登蓮法師の役割―」〔駒沢国文〕14号、昭52・3。
- ⑯ 前掲②同書九三頁〜一〇二頁。
- ⑰ 「天神縁起繪巻―津田本と光信本―」〔美術研究〕126号、昭17・9。
- ⑱ 「洛陽北野天神縁起」解説〔伝承文学資料集〕『神道物語集(一)』所収。
- ⑲ 前掲⑯と同じ。
- ⑳ ただし、和歌の第五句は延慶本と相違している。引用は、『新編国歌大観 第二巻私撰集編』(角川書店)による。
- ㉑ 引用は、『北野天神御託宣記文』(神道大系 神仕編11北野)所収による。
- ㉒ 前掲⑯と同じ。
- ㉓ 「平家物語構想論の可能性」〔同志社国文学〕17号、昭56・3。
- ㉔ 前掲⑨や、他に「大将争い事件の構想」(広島女学院大学国語国文学誌)昭49・12)等があり、いずれも前掲②の書に収められている。
- ㉕ 佐伯真一氏「平家物語燕丹説話の成立」〔軍記と語り物〕15号、昭54・3)など。

〔付記〕

本稿は、昭和六一年度軍記物談話会八月の例会（於帝塚山学院大学）において口頭発表したものに補正を加えて成ったものである。発表の席上において幾人かの先生方に貴重な御意見を賜り、稿を成すにあたって参考にさせて頂いた。この場を借りて御礼を申しあげたい。

前号（第28号）要目（昭和61年12月刊）

『源氏物語に』みる『物語の論理』……………松田 薫

——女三宮造型の意義をめぐって——

小名狂言における△とりなし▽の方法……………稲田 秀雄

「菊花の約」考……………李 国勝

横光利一「上海」……………小川 直美

——吉行エイスケとの比較において——

谷崎潤一郎「少将滋幹の母」論……………風呂本 薫

——新聞連載における小説形式——